

『通俗三國志』 試論

——軍記の表現の援用とその指向性——

田 中 尚 子

はじめに

日本における〈三國志〉⁽¹⁾の享受は、日本国内の文化・社会的状況とリンクする形で徐々に深化していった。⁽²⁾緩やかだった享受の流れは、十七世紀初頭に日本に伝わってきた『三國志演義』(以下『演義』)⁽³⁾の翻訳本であるところの『通俗三國志』の登場によって一気に早まり、それこそ現代の三國志人気にも繋がる基盤が形成された。同書が広く流布した一因として、その翻訳の際の意図的改変が存在すると筆者は考える。本稿は、その改変の手法の検討から、『通俗三國志』翻訳の一樣相を窺うものである。

一、『通俗三國志』概観と成立前夜の動き

『通俗三國志』には未解明の点が多々残される。成立は元禄二一五(一六八九—一六九二)年、訳者は湖南文山とされるが、そもそもこの『湖南文山』から未詳で、他に天龍寺の僧、義徹・月堂兄弟の手になったという説や、『通俗漢楚軍談』、『通俗阿漢紀

事』、『通俗唐太宗軍鑑』の訳者、夢梅軒章峰・称好軒徹庵兄弟が『通俗三國志』をも手がけたという説も見えるが、これらの人物にしたところで正体不明である。成立事情に関しても、対島の以酏庵(日朝外交を取り仕切っていた輪番僧が居住した場所、輪番僧は五山から派遣されていた)で行われていた三國志講談を聞いた西川嘉長なる京都の飾屋が、刊行に尽力したらしいが、これも確証を得られない。さらには十七世紀初頭の『演義』流入から『通俗三國志』成立までの過程も明らかにならなっておらず、数十年の空白期間を埋めることができない。『通俗三國志』成立後、同書に発想を得た数多くの作品が生み出されていく、その後世の諸作品への影響の大きさ⁽⁷⁾を考えると、信じがたい状況である。これについては、網羅的に諸資料にあたつて明らかにしていくのが最善の道には違いないが、『通俗三國志』の読みという別のアプローチからも、当該書の成立事情を窺うことは可能ではないだろうか。

『通俗三國志』の翻訳の性格については、「原文に忠実なものだが、よくこなれており、時に原文より具象性の濃いものとなつ

ている」⁽⁸⁾、「大むね原文にかなり忠実に沿い、しかもわかりやすくこなれた日本文」⁽⁹⁾などと評され、基本的には原文に対しての忠実性が言われてきたが、その中で注目したいのが、『太平記』等の軍記に影響を受けた修辭が多用されていることを指摘した長尾直茂氏の論である。もともと氏の眼目は、かくの如き「通俗三国志」の修辭を、『通俗漢楚軍談』、『通俗兩漢紀事』のそれと比較することによって、『通俗三国志』の訳者が、夢梅軒草峰・称好軒徹庵であるという説を補強するところにあつた。

訳者の判定材料として、軍記の影響を受けた修辭を取り上げることも重要なことながら、その修辭自体についても、もう少し目を向けるべきではないだろうか。用いられた修辭に訳者の意図は見出し得ないのか、そもそもなぜそのような修辭が使われるに至つたのか——、そういった問題設定は十分成り立ちうると思われる。中村幸彦氏が、徳川時代の初めから元禄期にかけての軍記出版の盛行に乗じて、『通俗三国志』をはじめとする中国歴史小説を扱う通俗物が数多く作られていったのではないかと推論を呈示しているところからも、歴史——中でも合戦というテーマを物語つているところでの『演義』と軍記の共通性は、後者が単に前者の出版を導いただけではなく、翻訳面にも影響を与えたとしても何ら不思議ではない。

さらにもう一点、両者の関係性を示唆するものとして、林鶯峰の『国史館日録』（寛文二十年、一六六一—一六七〇）、その弟子、田中止邱が加点了和刻本『三国志』の刊行（寛文十年）がある。これらとともに、先に触れた『演義』流入から『通俗三国

志』が成立するまでの空白期間内に成立しており、『演義』、『通俗三国志』に対する叙述ではないものの、『通俗三国志』成立へと向かう動きを垣間見ることが可能で、直接かかわる資料が見つからない現状においては、(三国志) 享受の様相を窺い知る貴重なテキストと考えられる。これらに関する詳細な検討は別稿に譲るが、大まかに記せば、それまで儒学的興味によって享受されていた(三国志)が、自国内での歴史書編纂意識の高まりに伴い、歴史的な面に関心が持たれ、その中で、正統論・南北朝正閏論といった面から、三国時代が南北朝時代や源平合戦時代に準えらるる現象が見えるようになっていく、当時の(三国志)享受の変遷過程がこれらから窺えるのである。この時期に生まれた、対(三国志)観は、おそらく『通俗三国志』が成立する時代にも受け継がれていたのではないかと思われる。

このような『通俗三国志』成立前夜の動きを鑑みれば、軍記など合戦を扱った作品の表現が、『演義』翻訳に際して何らかの影響を与えていたのではないかと推論は、強ち的外れなものでもなく、この問題を取り上げることには意味があると考える。中でも正統論問題などでその歴史に類似性が見出せる『太平記』の存在は注目すべきであろう。本稿を記すに際し、初期から後期にかけての軍記作品を参看したが、相対的に見て、やはり『太平記』の表現を下敷きとしておぼしき箇所が多いように思われる。後期軍記はじめ近世にかけての諸作品への『太平記』の影響の大きさを考えれば、今回取り上げる『通俗三国志』にもその影響が及んでいる可能性は高く、言ってみれば、この『通俗三国

志」も、近世期における「太平記」享受の一齣を形成しているのである。よつて本稿では軍記(特に「太平記」)の表現の利用といった観点から、「通俗三国志」の翻訳姿勢について若干の考察を加えることとする。尚、底本に関しては、「演義」は「通俗三国志」の底本とされている「李卓吾先生批評三国志」(以下、李評本)を、「太平記」は慶長八年古活字本を用いる。「太平記」には諸本が多いものの、近世に流布したものをを使うのが今回の作業においては妥当と考えるからである。もちろん「太平記」のみの影響によつて当該テクストが成り立つたわけではなく、同書成立以前に存在した数多くの作品が何かしらの影響を与えているのは間違いない。本稿で述べることが、あくまでも「通俗三国志」における翻訳姿勢の一樣相であることは、はじめに言っておく。

二、軍記に見られる表現の利用

軍記などでもよく見られる合戦描写の定型表現は、「通俗三国志」中、随所で用いられる。「雨ノ降ル如(射ル)」、「スル者、数ヲ知ズ」、「血ハ流レテ泉ノ如ク」、「ノコリ少ニ討レ」、「弓ヲ曳テ下射ル」、「馬ヨリ倒ニ落」、「辛キ命ヲ扶カリ」など、使用例は枚挙に暇がない。試みに「辛キ命ヲ扶カリ」を原文と対応させてみるに、「典章救了曹操」とある李評本を、「曹操辛キ命ヲ扶カリ」と主体を入れ替えて訳したり、ただ単に逃げたことを記す原文「尽皆棄馬而走」を、「馬ヲ棄テ、物ノ具ヲ棄テ、這々ニ辛キ命ヲ扶カリ」と書き替えるように、明らかに直訳ではなくなっている。

心情、状況説明を挿入的に付け加える場合もある。たとえば、「太史慈カナハジトヤ思ケン、東ノ門ヨリ落行ケリ」という表現に相当する李評本の箇所を見ると、「太史慈、正往東門路上走」としか記されていない。太史慈の撤退を記すだけの原文に、その時の彼の気持ちを推し量った表現、「カナハジトヤ思ケン」が独自に添えられるのだ。

「不思議」という表現も同様である。「通俗三国志」の中では、「不思議ノ命ヲ扶カリテ」、「不思議ノ勝利」と名詞を修飾するパターン、そして「王允程ナク三族ヲ滅サレケルコソ不思議ナレ」と述語になるパターンなど、様々な形で多用されることになるが、それらの李評本相当箇所では「不思議」という表現は用いられていない。参考までに述語のパターンとして引用した部分の原文を挙げれば、「允遂將豎下獄中縊死」とあるだけであつて、「不思議」と評価する文脈などは全く見られないのだ。こういった評価は軍記の表現の中でもよく付け加えられるものといえよう。

このように、「通俗三国志」は合戦描写の定型表現を参考にしつつ、原文にはない要素を訳し添えるのだが、先にも述べたとおり、その中には、「太平記」の表現を彷彿とさせるものが見える。そこで、ここからは「太平記」の表現と対照させて検討していくこととする。

① 嫡子曹昂ハ、遥ニ落ノビタリケルガ、父ノ危ヲ見テ、馬ヲ求テ馳キタリ、曹操ヲ扶ケノセテ、趕カクル敵ヲ支ケルガ、了ニ乱レ矢ニ射死サレタリ。サレバ討レタル屍、路ニ横タハリテ、軍果テ後モ、清河ノ流、血ニ成テ、紅楓ノ陰ヲ行水ノ、

夕陽ヲ涵セルガ如ナリ。(通俗三国志) 卷七「曹操興兵伐張繡」
・長子曹昂、以馬救操、操方得命。曹昂被亂箭射死。人馬填滿
溝河。
(李評本第十六回「曹操興兵張繡」)

②太史慈先ハヤト喜び、自ラ真先ニ進ミ、兵ヲ引テ入ケルヲ、
城ノ上ヨリ見スマシテ、一声ノ鉄砲ヲ鳴程コソアレ、矢倉ノ
上、壁ノ陰ヨリ、矢ヲ射ルコト雨ノ如ク、大木大石ヲ投カケ
シカバ、太史慈急ニ退キケルニ、全身ニ射クテラレタル矢
ハ、糞ノ毛ヨリモ繁シ。
(通俗三国志) 卷二十二「孫權大戰合肥城」

・太史慈、見城門大開、只道内変、挺鎗縦馬先入。城上砲響、
亂箭射下、太史慈急退、身中數箭。
(李評本第五十三回「孫仲謀合淝城大戰」)

①、②は、合戦場面での死の描写である。①は全景描写、②は個人
のクローズアップだが、両者ともに傍線部を原文(波線部)の
直訳とみなすにはかなり距離がある。この原文よりもむしろ「太
平記」の、「サシモ深キ谷ニ、死人ニテコソウメタリケレ。サレ
バ軍散ジテ後マデモ木津河ノ流血ニ成テ、紅葉ノ陰ヲ行水ノ紅深
キニ不_レ異」(卷三「笠置軍事付陶山小見山夜討事」)、「二人ノ者共出
シ屏ノ脇ニ引傍テ、木戸ヲ切落サントシケル間、城中是ニ騒デ、
土小間・櫓ノ上ヨリ、雨ノ降ガ如クニ射ケル矢、二人ノ者共方鎧
ニ、糞毛ノ如クニゾ立タリケル」(卷六「赤坂合戦事付人見本間拔懸
事」)に近いと言えるのではないだろうか。②の、射られる様子
を「糞の毛」にたとえるのは、たとえば「陸奥話記」に「先是官
軍所射之矢立柵面樓頭猶如糞毛」とあるように、「太平記」に限

られた表現とは言えないだろうが、それでも文脈的には「太
平記」により似通った表現と言える。
細かなレヴェルではあるが、「太平記」諸本を考慮するに、注
目すべき箇所も見られる。

③孔明(中略)書院ニ入テ半日バカリ閑談シ、「今天下三分シテ
鼎ノ如クニ峙ツ、蜀ハ乃チ漢ノ正統ナリ。我吳魏ヲ伐テ天下
ヲ一統セント欲ス。先イツレノ国ヲ討ツベキゾ」ト問ケレ
バ、
(通俗三国志) 卷三十六「曹丕大興五路兵」

・孔明問曰、「今蜀魏吳鼎分三国、蜀主乃大漢也。欲討伐二
国、一統中興。当先伐何国」。
(李評本第八十五回「曹丕五路下西川」)

確かに原文の「鼎分」から、オリジナルな訳として「鼎の如く峙
つ」が成立しないと断言できないが、しかし「太平記」卷二十
八「太宰小式奉智直冬事」中の、まさしく三国にかかわる故事を
引いた箇所、「只漢ノ代傾テ後、吳魏蜀ノ三国鼎ノ如クニ峙
テ、互ニニヲ亡サントセシ戦国ノ始ニ相似タリ」とあり、しかも
西源院本などでは傍線部分が「鼎ノ如クニ立テ」となっているこ
とを考えると、「太平記」、中でも慶長八年古活字版のような流布
本の表現から発生したとみる方が自然な思考であろう。

原文にない評価が添えられ、状況を叙情的に記していく「通俗
三国志」の姿勢が確認できる例もある。蜀滅亡の場面を引用しよ
う。

④又劍門関ニ使ヲ馳テ、姜維ガ降參ヲ催シ、黄皓ガ讒佞ニシ
テ、国ヲ乱リシヲ憎ミ、生取テ殺サントセシニ、黄皓ヒソカ

二、鄧艾方大將ニ金銀ヲ賂テ、纒ニ命ヲ免レタリ。嗚呼コノ日、何ナル日ゾヤ。炎興元年十二月一日ト申ニ、漢朝四百余年ノ天下、タチマチニ滅テ、魏ノ為ニ、併吞セラレタル事コソ浅狹ケレ。

〔通俗三國志〕卷四十九「蜀主劉禪輿機降魏」

又令人説姜維帰降。艾聞黃皓奸險、欲捉來斬之。皓用金寶賂其左右、因此得免。是日漢亡。後史官有詩歎曰（詩、略）。

〔李評本第一八回「蜀後主輿機出降」〕

ただ単に「是日漢亡」とする李評本の表現に満足できなかったか、蜀滅亡への悲嘆を描き込む（傍線部）のだが、同じく権威の滅亡を描いた『太平記』卷十「高時并一門以下於東勝寺自害事」における北条一族滅亡場面、すなわち「嗚呼此日何ナル日ゾヤ。元弘三年五月二十二日ト申ニ、平家九代ノ繁昌一時ニ滅亡シテ、源氏多年ノ蟄懐一朝ニ開ル事ヲ得タリ」とよく似ている。滅亡場面をいかに描くか考へる際に、『太平記』中の類似場面が浮かんだとしても何ら不思議ではない。同様の例として、三國すべてが滅び、新たな晋王朝の成立を語る作品掉尾を挙げよう。

⑤王濬ヲ輔国大將軍ニ封ジ、其余ノ將士、コトクク恩賞アリテ、天下大ニ定マル。蜀主劉禪、晋ノ太康七年ニ薨ジ、魏主曹奐、太康元年ニ薨ジ、呉主孫皓、太康四年ニ薨ジ、此ヨリ三國晋帝ニ帰シテ、司馬炎一統ノ天下トナリ、万民無為ノ化ニ服シ、四海初テ太平ヲ、楽トコソ目出度ケレ。

〔通俗三國志〕卷五十「王濬計取石頭城」

封王濬為輔国大將軍、其余各皆封賞。後史官有詩、嘆東吳曰（詩、略）。後主劉禪、亡於晋太康七年。魏主曹奐、亡於太康

元年。呉主孫皓、亡於太康四年。三主皆善終。自此三國帰於晋帝司馬炎、為一統之基矣。後人有古風一篇、以封卷末而嘆曰（詩、略）。

〔李評本第一二〇回「王濬計取石頭城」〕

原文からは「太平」を「目出度」と言祝ぐ意識などは読みとれない。「目出度」として作品を終えるといへば、『太平記』卷四十「細河右馬頭自西国上洛事」の「中夏無為ノ代ニ成テ、目出カリシ事共也」が思い当たる。これが、原文とは異なる末尾を設定する発想の根底にあったのではなからうか。

ここまで検討してきたとおり、原文と訳文間の表現の隔たりは、その翻訳過程に、『太平記』などの軍記に見られる表現の援用を想定すると、説明が付くのである。中でも、④、⑤のような話末評、また先に見た、心情・状況説明の挿入は、原文をわかりやすく伝えるというレヴェルにとどまらない、訳者の明確な意図、構想が存在するように思われる。

三、区切れの位置の移動

訳者の意図・構想について論じるためには、まず「演義」の区切れについて触れておかねばなるまい。「演義」は、一つの話題を最後まで語らず、結末部分のみ次章へと持ち越す形式をとる。

「且聴下回分解」、「下回便見」という言葉で、次の章回に続けられることが多く、またそういった言葉の有無にかかわらず、「性命如何」、「此人是誰」などのように、次回への興味をかき立てるべく、何かしらの疑問文形で終わることがほとんどである。李評本の第九・十回を例にとってみれば、第九回「李催郭汜寇長安」

で、李傕・郭汜の二人が、献帝の命を狙っていることを記し、「漢天子、性命如何。但聽下回分解（総評、略）」という言葉でまとめて、読者の関心を高めるにもかかわらず、続く第十回「李傕郭汜殺樊稠」では、二人は張濟・樊稠に諫められ、あっさりとして天子殺害を断念してしまい、何事もなかったかのように、次なる話題へと進んでいくといった具合である。

しかし、この場面、「通俗三国志」（巻四「李傕郭汜寇長安」）は「演義」の区切れを踏襲せずに、独自の区切れを設定することに。すなわち、董卓の葬儀、その際に天変地異が頻りに起きたことを記し（「演義」十回「李傕郭汜殺樊稠」内に相当、それに対し、「余り二君臣ヲ悩シ人民ヲ苦メタル董卓ナレバ、天地神明モ容主ハヌニヤト身ノ毛モ弥堅事共ナリ」という評価を付して完結させるのだ。つまり、「通俗三国志」は、話題の次回への持ち越しを避け、一章段完結を定型としたのである。

逆の現象——「演義」が区切っていない箇所を、「通俗三国志」が切ってしまう場合も確認しておこう。「通俗三国志」巻四「陶謙再讓徐州」では陶謙の最期が描かれる。牧の地位を劉備に譲るなど遺言めいた彼の行為に続いて、死、葬送を語り、「陶謙死スル時六十三歳、玄徳喪ヲ発シテ、大小ノ將士ト孝ヲ掛テ祭ラナシ、黄河ノ原ニ厚ク葬リ、陶謙ガ遺表ヲ朝廷ニ奏セラル」という言葉で結ぶ。そして続く巻五「曹操定陶破呂布」では、「徐州ノ太守陶謙死シテ、劉玄徳ノノ讓ヲ受、自ら徐州ノ牧ト称スル由」という冒頭の言葉をもつて前章段の内容をまとめ、それを踏まえて「ソノ聞ヘ有ケレバ、曹操鄆城ニ在テ、コノコトヲ聞、大

ニ怒テ申ケルハ」と、曹操へと視線を移して物語を進めていく。

「演義」はこの直後、牧を譲られた件で曹操の怒りの矛先が向けられた劉備の命の危機を語るところで区切るのだが、そのような「演義」の形に従わず、「通俗三国志」が、前述の箇所を句切れとしたのは、陶謙の死という、一人の人生の最期こそ、話の終わりにふさわしいと考えたからではないだろうか。このまとめ方は、董卓の死で巻を改める先の例とも共通する意識に基づいたものと言える。「通俗三国志」は、一つの話題を同一章段内で語り終え、次章段では新たな話題に移るという構成を取ることを選んだのだ。

ちなみに末尾と対応して導入部分も変化する。「通俗三国志」の各章段の冒頭を見ると、具体的な年月日や「去ホドニ」、「コノ時」、「次ノ日」という言葉から始まって、前章段からの時間的推移を意識して語り出すことが多く、また主語から始まりながらも、そこに「ステニ」という言葉を添えることによつて、これまでの時間の経過を意識させる箇所も少なくない。前の話題と分断せんとする意識の表れであつて、そこから一話完結の意識の強いことは窺える。特に先の二例のように死をもつて完結させるところは、話を盛り上げるために気軽に生命の危機を利用してしまふ「演義」とはまさに対照的である。

この、死の扱いに対する意識差について考える時、「演義」と軍記の比較文学的研究の成果が注目される。筆者はこれまで両者の対比研究を行い、最大の相違点として、敗者の文学である軍記と勝者の文学である「演義」という性質を指摘してきたが、勝

者・勝利を昂揚する文学である「演義」に対し、軍記では、死者・敗者に筆を削いており、ある人物の死を語って章段を完結させることも多いのである。²⁰⁾「演義」のように、盛り上げをはかって話題を途中で切り上げることなど決してないのだが、そう考えてみると、「通俗三国志」は原拠である「演義」よりも、軍記の構成の方に近いことになる。

この問題は話末評の問題ともかかわってくる。区切れという構成だけではなく、話末に付された表現からも、「通俗三国志」が「演義」から乖離し、軍記にも通ずる構想のもとに編み直されていることが窺えるのである。

四、話末評の増加——敗者、死者への傾倒

「通俗三国志」は、もともと完結していない箇所区切つていくのだから、それに際して何らかの操作が行われたことは間違いない。話末評を独自に付けていく方法がその一つとして挙げられよう。一部はすでに触れてきた(第二節④、⑤の例、第三節での董卓の死に対する話末評)が、これら付加された話末評にはある指向が存在する。それは滅びの予測、嘆き、敗者・死者への視線である。

李評本第三回「董卓議立陳留王」に「見何太后、俱各下淚痛哭、失伝国璽」と、「伝国ノ玉璽」の喪失を悲しむ場面がある。

「通俗三国志」は当該場面を、「帝ハ何太后ニ見ヘテ、共ニ御涙ニ咽玉ヒ、伝国ノ玉璽ヲ失ヒヌトテ、大ニ哭キ哀玉ヲ。コノ玉璽ハ、秦ノ始皇ヨリ以來相伝リテ、代々ノ帝、国ヲ保玉ヘル印ナル

二、此時ニ失タルハ、漢ノ世ノ衰タルユヘニヤトテ、聞人眉ヲゾ顰ケル」(巻一「董卓起兵入洛陽」とし、しかもここで章段を改める。傍線部に対応する本文は原文には見えず、つまりは「通俗三国志」の独自の添加となる。「伝国ノ玉璽」という不明瞭なタームに対する解説を付すという特徴も指摘することができるのであるが、それ以上に注目すべきは、この玉璽喪失を、不吉なこと、すなわち漢朝衰滅の前兆として位置付ける評を付す姿勢である。

例を重ねよう。李評本第十四回「呂布月夜奪徐州」には「朝中大臣、有事先稟曹操、然後方奏天子」と、曹操の専制とそれに伴つての天子の權威の弱体化が記されるが、「通俗三国志」巻五「遷變興曹操秉政」では、「浩リシ後ハ朝廷次第ニ衰テ、故老ノ大臣モ、ミナ、曹操ガ威ヲ怖テ、凡ソ天下ノ政、マツ曹操ニ告テ、其後ニ天子ニ奏ス。此ホドニ不定ノ世ノ中、一人ヲ除ケバ一人起ル。漢家ノ運ノ末コソ淺穢ケレ」として章を終える。曹操の横暴を増幅させ、さらに漢王朝滅亡を見通して、慨嘆の思いを付け足すのである。

その曹操自身の死に対しても、事前に予兆めいた、しかも非難を含んだ評が添えられる。李評本第七十八回「魏太子曹丕秉政」では、病で苦しむ最中に曹操が夢を見、家臣、賈詡に夢説きをさせる話が語られる。その夢は、実は自らの死と魏王朝の滅亡を予言する凶夢だったのだが、賈詡は吉夢と誤判、曹操も疑いもせず、にその夢説きを信じてしまうというくだりがさらに続く。「通俗三国志」(巻三十三「曹丕執政称魏王」)は、曹操が賈詡の言葉を信じているところまでは原文を忠実に訳していくが、その後には、「了二

司馬氏ノ天下トナルベキヲ、知ザリケルコソウタテケレ」という評価を加える。ここでも、その後の曹操、ひいては魏王朝の滅亡を見通した上での物言いがなされ、それに気付いていない現王朝の油断に対して批判する姿勢が存在するのである。

死に対する作者評は他にも確認できる。李評本第七回「孫堅跨江戦劉表」で「人馬皆死于岷山之内、寿止三十七歳。時漢獻帝初平三年、歳在辛未、十一月初七日」と記す孫堅の死に対し、「通俗三国志」(卷三「孫堅浮江戦劉表」)は「二十騎ノ兵トミナ一処ニテ滅ニケル。ソノ年三十七歳。時二初平三年辛未十一月七日ナリ。是マコトニ、先年玉璽ヲ盗シ時、詐テ誓ヲ成タル天罰ニヤト、思ヒ合サレテ恐シケレ」と傍線部を付加し、李評本第四十一回「劉玄德敗走江陵」に「蔡夫人抱子劉琮痛哭。于禁喝令軍士下手、止有故将王威、奮力相殺、被乱軍殺之。可惜劉琮。全家被于禁殺了、便回、靜軒詩曰(詩、略)とある劉琮の死にも、「通俗三国志」(卷十六「玄德敗走江陵」)は「蔡夫人劉琮ヲ抱テ泣号フ。主ノ行衛ヲ見届ントテ、一人従ヒ来レル王威、力ヲ奮テ、向フ敵ニ走り蒐リ、火ヲ散シテ戦ケルガ、了ニ大勢ニ困レテ、討死シケレバ、劉琮ガ一類、一人モ残ス亡サレケル。運ノ末コソカナシケレ」と評するとおりである。死や滅亡に対して、何らかの思い入れがあることは間違いない。こういった評は、作品全体にわたって見え、死・滅亡・衰頹といった方向へと話のテーマを移行させているのだが、原文にはそのような指向はなく、敗者・死者・衰滅を軸に据えた「通俗三国志」の構想は、「演義」のそれとは全く異なるのである。

かくの如き話末評を取り込む背景にも、軍記の影響を想定することが可能かもしれない。試みに「太平記」の一節を挙げれば、

卷一「後醍醐天皇御治世事付武家繁昌事」では、「時政九代ノ後胤、前相模守平高時入道崇鑿ガ代ニ至テ、天地命ヲ革ムベキ危機云頭レタリ」と今後を予期し、そして「見人眉ヲ蹙メ、聽人唇ヲ翻ス」と世間の反感を記していく。さらには、卷八「谷堂炎上事」の「偏ニ武運ノ可レ尽前表哉ト、人皆唇ヲ翻ケルガ、果シテ幾程モ非ザルニ、六波羅皆馬場ニテ亡ビ、一類悉ク鎌倉ニテ失セケル事コソ不思議ナレ」や、卷十四「新田足利確執奏状事」の「果シテ今、新田・足利一家ノ好ミヲ忘レ怨讐ノ思ヲナシ、互ニ亡サント牙ヲ砥ノ志頭レテ、早天下ノ乱ト成ニケルコソ淺猿ケレ」、「元弘ノ兵乱ノ後、天下一統ニ帰シテ万民無事ニ誇トイヘドモ、其弊猶殘テ四海未ダ安堵ノ思ヲ不_レ成処ニ、此事出来テ諸國ノ軍勢共催促ニ隨ヘバ、コハ如何ナル世中ゾヤトテ、安キ意モ無リケリ」などのように、今後の不安、衰滅への予測というのが随所に表れている。

そう考えてみると、「通俗三国志」が、その冒頭部を李評本ではなく、敢えて毛宗崗本の如き本文を利用したことも理解できよう。「通俗三国志」卷一「祭天地桃園結義」の冒頭部を引用しよう。

熟邦家ノ興廢ヲ視ルニ、古ヨリ今ニ至ルマデ、治極則入乱、乱極則入治。ソノ理陰陽ノ消長、寒暑ノ往来セルガ如シ。此故二人君小_レ心コト兢々業々トシテ須臾モ敢テ不_レ忘焉。堯舜モ猶病矣トス。況ヤ庸人ヲヤ。漢ノ高祖三尺ノ劍ヲ

提テ、秦ノ乱ヲ平ゲ玉ヒシヨリ、哀帝ノ御時マデ二百余年、天下ヨク治リシニ、王莽漫二位ヲ篡テ、海宇又大ニ乱ル。然ルヲ光武コレヲ平ゲテ、後漢ノ世ヲ興シ玉ヒ、質帝、桓帝ノ御時マデ、已ニ二百年ニ及ベリ。光武帝ヨリ十二代ノ天子ヲ、靈帝ト申奉ル。桓帝ノ讓ヲ受テ、御年十二歳ニテ帝位ニ即玉フ。

李評本第一回「祭天地桃園結義」の冒頭は、「後漢桓帝崩、靈帝即位、時年十二歳」という非常に簡略な表現である。この部分は先学が指摘する通り、毛宗崗本の「話說天下大勢、分久必合、周末七国分争、并入于秦、及秦滅之後、楚漢分争、又并入于漢、漢朝自高祖斬白蛇而起義、一統天下、後來光武中興、伝至献帝、遂分爲三国、推其治乱之由、殆始於桓・靈二帝。桓帝禁錮善類、崇信宦官。及桓帝崩、靈帝即位」を下敷きとしたのは間違いないからうが、こちらの表現を選択したのは、「通俗三国志」訳者の脳裏に、冒頭部のしかるべき姿というものが存在したからではないだろうか。いきなり本題に入るのではなく、過去から今までの歴史を振り返り、そして今の時代をそこから位置付け、さらにはこの後に書かれる戦乱、滅びをも予測させる叙述が冒頭には必要だったのである。帝の代を辿ったり、物事の濫觴を語るなど、古から今の流れを位置付けていく姿勢は、軍記の序としては定番と言えよう。そういった定番が翻訳に際して援用され、単なる直訳に留まらない作品世界を作り出していったのである。もちろん「演義」訳者が、「太平記」やその他の軍記を手元に置いてその翻訳作業を行ったなどと言うつもりはない。合戦を扱った物語である

「演義」翻訳に際し、同じような性質を持つ軍記が想起されたといった程度であろうし、また軍記以外の作品・要素の影響も当然あることだろう。が、ともかく「通俗三国志」成立に際し、軍記が意識されていたことは間違いない。

如上、軍記とのかかわりから「通俗三国志」の指向性を探ってきた。軍記世界を下敷きとすることによって、昂揚の文学であった「演義」を（もちろんその要素を完全に捨象したわけではないが）、滅びへと向かう国々や英雄達を描き込む、敗者・滅亡の文学、「通俗三国志」へと作り替えた結果、身近に感じられる世界観を持った作品となり、そこから多くの読者を獲得していったと思われる。そしてその後、当該テキストから派生してたくさんの「三国志」関連テキストが成立、さらにその享受層は広がっていくこととなる。日本における「三国志」享受の様相は、当該テキストによって急激に深化したのである。その動きは、当時の状況——歴史書編纂への関心の高まり、南北朝時代と三国時代との類似性の意識、和刻本「三国志」の刊行、さらには軍記刊行の盛行——と切り離して考えることはできない。異国の歴史を扱った物語は、当時の日本の動きの中に組み込まれることによって、日本文学の一つとして再生産されたのである。

終わりに

かつて「太平記」は、混沌とした動乱の世・乱世に類似性を覚えて、それまで日本において看過されていた「三国志」を積極的に取り込み、その作品に新たな色を添えた。そして数百年の時を

経て、今度は「演義」が「太平記」に類似性を感じて翻訳時に利用することとなり、それによって日本人受けする作品、「通俗三国志」へと生まれ変わった。「太平記」と「三国志」はお互いに影響を与え合っていたのである。もちろんこれは「太平記」だけに限られたことではない。「三国志」の享受は、一時代、特定テキスト間に限定されるものではなく、長期に渡って、様々な面で複雑に交差し合っている。そういった複雑な交差を大系立てて捉えていくことが今求められているのではないだろうか。

底本一覽 「通俗三国志」↓松平文庫(島原図書館内) 蔵本(欠巻部分は東京大学附属図書館蔵本を用いた、また対訳中国歴史小説選集(ゆまに書房)を参照した)／李評本↓蓬左文庫蔵本影印(対訳中国歴史小説選集(ゆまに書房)／毛宗崗本↓上海古籍出版社／慶長八年古活字本「太平記」↓日本古典文学大系／西源院本↓刀江書院／「陸奥話記」↓古典文庫

※引用に際し、句読点・濁点等、表記を私意に改めた箇所がある。

注一) 三国志言説一般を示す意味で、(へ)を付して表記する。

- (2) その具体的な変遷は、田中尚子「『太平記』における(へ)三国志の享受」(和漢比較文学 23 一九九・八、「清原宣賢と(へ)三国志」)「蒙求聴塵」を中心として」(中世文学 46 二〇〇一・六)、「近世前期における(へ)三国志」享受の一輪「『国史館日録』を中心として」(説話文学研究 38 近日刊行予定) 参照。
- (3) 林羅山の慶長九(一六〇四)年既読書目録、「梅村載筆」、天海僧正日光山文庫書籍目録に「演義」の名が見え、また駿河御讀本として水戸家、尾張家に「演義」が譲られている。尚、邱嶺氏は「(太平記)における『三国故事』(中京大学文学部紀要 36 一 二〇〇一・七)において、「演義」の成立をかなり早い時期に設定し、「太平

記」所収の三国志説話の典拠となり得ると論じている。しかし、「演義」が日本に入ってきていることを確認できる資料は、現在の段階では、江戸以前には確認できず、また「演義」の成立自体そこまで早くてよいのかにも疑問が残る。よって、氏の説に対しては慎重でありたい。

- (4) 田中大観の「大観隨筆」(内閣文庫蔵)に「近世国語書有通俗三国志、蓋因羅貫中演義、而以国語訳之者也、天龍寺僧義敏者、義敏失其字、称敵蔵主、地藏院某長老弟子也、有弟亦为僧、字月堂、失其名、蓋義敏草創之未成而逝、月堂繼而成之遂以上梓、而刻本多月堂手」とある。

- (5) 敵密に言えは、「通俗漢楚軍談」は巻七までが章峰、巻八からが敵庵、「唐太宗軍鑑」は章峰、「通俗兩漢紀事」は敵庵の訳である。二人が「通俗三国志」の訳者であるという説は、徳田武氏「通俗三国志」の訳者(『日本近世小説と中国小説』青雲堂書店 一九八七・五)、長尾直茂氏「前期通俗物小考」―「通俗三国志」「通俗漢楚軍談」をめぐって―(『国文学論集 24 一九九〇・三)、「江戸時代元禄期における『三国志演義』翻訳の一樣相」統稿(『国語文 67 10 一九九八・十)、「近世における『三国志演義』―その翻訳と本邦への伝播をめぐって―」(『国文学 46 17 二〇〇一・六)などで指摘される。

- (6) 古藤文庵の「閑窓独言」(対馬叢書)に「西川嘉長京都ノ飾屋初名朝野細工上手、故今ニモ世上秘蔵セリ、御国ニ下リ、日吉少林庵口東頼ノ角ニ寓居セリ、年久シクシテ帰京セリ、偕其比輪番ノ以酌庵ニ定テ何有之ヲ「三国志」講釈ヲ聞テ、帰京後三国志開板、即三国志ノ序ニ嘉長ハ翁ト有之」とある。注(4)の「大観隨筆」とともに「通俗三国志」成立より後の記述であった、信憑性に欠ける。ただし、松平文庫蔵本「通俗三国志」の序、巻末には彼の名が見え、その点では対応はしている。

- (7) 「通俗三国志」は中国講史小説の翻訳の嚆矢となったと言われ、また享保九(一七二四)年「諸葛孔明鼎軍談」、天明八(一七八

(8) 年「画本三國志」、天保七(一八三六)年「絵本通俗三國志」など三國志関連の作品も続々と生まれている。

(9) 「日本古典文学大辞典」「通俗三國志」の項目より。

(10) 「対訳中国歴史小説選集」(ゆまに書房、徳田武氏の解説)。

(11) 注(5)に引用した長尾氏二つ目の論文。①「蓬山回七」、②

「大山ノ崩ルガ如ク喚テ」、③「怒レル鬼鬚左右ニ分レテ悪鬼羅刹モ是ニハ争テ及ベキ」、④「恰モ泰山ヲ以テ卵ヲ壓ガ如ナリシカバ」、⑤「虎鬚倒ニ上リテ、怒レル眼百練ノ鏡ノ如ナリケレバ」、

⑥「福麻竹葦ノ如ク」、⑦「香象ノ海ヲ渡テ波ノ開ルガ如ク」の七

点を、「太平記」の表現と重なる箇所として氏は指摘する。尚、③

と⑤の表現は(さらに付け加えれば)、③の表現の直前にある、「頭

ノ髪倒ニ上リテ師子ノ怒毛ノ如ク、眼ハ逆ニ裂テ光リ百練ノ鏡ニ朱

ヲ洒ギ」も当てはまるが)、もともとは「太平記」が漢籍の影響を

受け、作り出したものと思われ、文章表現成立の際の、日中諸テク

ストの複雑な交差を窺わせる。その点については田中尚子「軍記物

語と「三國志演義」の比較研究—人物形象の相違を中心に—(「早

稲田大学大学院文学研究科紀要44」3、一九九二)参照。

(12) 「通俗物雑談—近世翻訳小説について」(「中村幸彦著述集」第

七巻、一九八四・三)

(13) 注(2)最後に掲げた論文参照。

(14) 事実、西源院などの古態本よりも慶長八年古活字本の方が、「通

俗三國志」の表現との一致度が高い。

(15) 延慶本「平家物語」(勉誠社)第六本「平家男女多被生處事」に

「元暦二年ノ春ノ暮、何ナル年月ナレバ、一人海中ニ沈給ヒ、百官

波上ニ浮ラン」、第六末「法皇小原へ御幸成ル事」に「寿永二年ハ

何ナル年ゾヤ、天子翠体悉ク西海波下ニ流ケム、三月下旬ハ何ナル

月ゾヤ、月卿雲客併ラ関路ノ湖底ニ朽ニケム」などもあるが、やは

りこれらよりは「太平記」の表現の方が近いように思われる。

(16) 「清須合戦記」(統群書類従)「同年ノ秋信長上洛シ、將軍家義輝

公へ参勤ヲ遂、尾張守護職ヲ拜セラル、是ヨリ尾張ヲバ一円ニ進止

アリケルゾ目出度カリケル」、「豊後陳聞書」(統群書類従)に「頓

テ御上洛有テ、其年ノ暮ツカタ、御父子共打連テ、筑前國へ御入

國、目出度事共也」など、末尾を「目出度」とするものは他にも

あるが、これら自体が「太平記」の影響下にあると考えた方がよか

ろう。

(17) 全三四〇章中、前者は一六四例、後者は二〇例。

(18) 話が完結していない章回は最終章のみ。

(19) 「演義」でも「却説」(「さて」、「そこで」の意)という言葉

を多用するが、すでに言及したように末尾が完結していないため、

この言葉にどこまで話題転換の機能があるのかはよくわからない。

語りの一つの形式であろう。

(20) 他にも巻十三「曹操決漳河滄冀州」、巻二十三「來陽吳張飛騰麻

統」などで死を語った直後に章段が変わっており、死をもって完結

させようとする意識が強いように思われる。

(21) 田中尚子「太平記」と「三國志演義」における智将の形象—楠

正成と諸葛孔明を中心に—(「比較文学年誌37」二〇〇一・三)、

「太平記」と「三國志演義」における死の叙述法—人物描写との

かわりから—(「比較文学」45、二〇〇三・三)、注(10)に記

した論文。

(22) 曹操・孫堅に関しては、章段の末尾ではないが、一つの話の終わ

り、まとめという意味合いでは、これらも話末評のうちに入るだろ

う。

(付記) 本稿は、平成十四年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員

奨励費)による研究成果の一部である。